

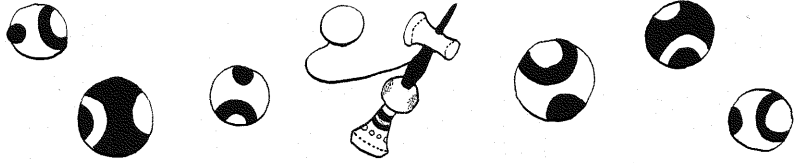
巻頭言

新しい幼保関係の創造

新澤 誠治

私は長い間、下町の小さな保育園の園長として「開かれた保育園」、「共に育て 共に育ち合う保育」と主張し、貧しい子の保育、障害児、延長、産休明け保育に取り組み、子ども、家庭とふれあい、時代の変化の中で変貌する家庭、地域を見つめ、更にその延長として子育て支援センターの所長をつとめました。

こうした保育園の空気、意識が身体にしみ込んだ人間が大学で教鞭をとる傍ら、「附属みどりヶ丘幼稚園」の園長になり、受けた当時は異文化の世界に入り込む感じで私は緊張して園の玄関をくぐりました。とにかく幼稚園に馴染み、保育の方針、内容を知ることから、私は園の歴史、沿革に関する資料を読み、主事と話をし、保育者一人ひとりの話を



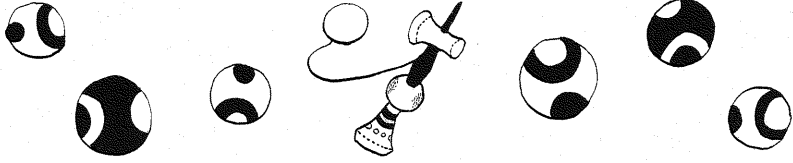
聞いたり、朝は主事と玄関に並び、親子を迎えることから始めました。

当初は、お迎えの時間に「え！ もうお帰り」という感じをもち、お揃いの園児服、カバン、丁寧な朝のご挨拶に戸惑うなど、時間、生活、文化の違いを感じつつも、今まで向こう岸に見えた幼稚園を身近に感じたり、保育者が口々にいう「一人ひとりを大切に！」「思い切り遊べる子ども」等の考え方に共感して、基本的には幼保の保育の原理は変わらないものだと実感し、ここから園長としてのスタートをしようという決心をしました。

幼稚園では「預かり保育」を実施することになっていました。保育者の中には預かり保育そのものに反対や「預かり」という言葉にひっかかる人もあったようです。私は「そのもの時間」としたらどうですか」と提案、ミヒヤエル・エンデ作の時間泥棒から時間を取り返す物語『モモ』を思い、預かり保育を子どもらしい時間、世界を保障していく場と考えました。

「この保育の間に母親たちは学習、話し合いの場をつくり、子育て、教育、子どもの環境等と話し合っていきましよう。私はコーヒーでも入れてみなさんと話を聴きますから」と保護者会で宣言しました（実際は体調を崩しサロン計画の実施はまだです）。

次に子どもの名前を覚え、家族と親しくなりたいと考え、「もし、良かったら、祖父母を含めた家族の写真の提供をお願いします」と依頼。わざわざ親の中には実家に帰って祖父母を写してくる人もいて、五月の末にはほとんどの家庭の写真が集まり、それを個人家庭票に貼り、朝の登園前に園長室でじっと見てから親子を迎えました。



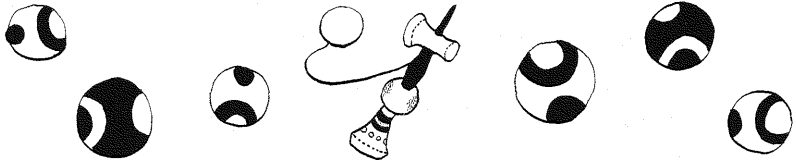
こんなことでスタート、秋に入り「みどりまつり」、十二月には「サンタクロースの来る日」等、大きな行事も一巡しました。この間に主事との打ち合わせ、職員会、保育計画とその実践、諸行事の参加、親との懇談会、期末の反省会が終わると、保育園時代に雑然とした空気の中で「共に」「みんな」で保育と標榜し、園や子育てセンターを運営してきた私には少しずつ、保育の考え方や意識の違いが感じられました。

一つには、子ども、親を教育するという意識に縛られ、園と親とは一線を引いた運営で、そこからは園に踏み込まないようにして、保育者は園内の囲みの中で保育に専念、園内で保育が「自己完結」しているなということを感じました。

同じようなことですが保育の計画、行事等の準備に多くの時間をとって話し合いをし、期末には年度当初にたてたクラスの方針がどれだけ達成されたかと反省する、計画、実践、反省、評価のサイクルがされている姿に、何か保育の考察の中に子ども、親との対話が抜けて、保育者だけにより「自己回転」しているという感じがしました。

幼保の一体化としての総合施設が国の施策として進められています。私は保育の総合化が財政の合理化、規制緩和等の経済的理由で進められ、これからの保育に対する高い理念もなく形だけの総合化になっていると思っています。

新潟地震で山林が崩れ、村の生活が破壊され、あらゆるつながりが分断されるように、いま子どもが育つ土壌である、家庭とその生活、地域社会の共同体が破壊され、このままいくと子どもの生命の輝きを失い、心が壊れていくような危機感を感じています。



「変わらない保育原理」と時代の中で現実に対応した「変わらなくてはならない保育姿勢」があると思います。従来の思考を破り、小さな実践を試みつつ、幼保関係の刷新を図っていききたいのだと思います。そのために幼保一体化に対する両者の制度の論争も必要ですが、同じテーブルについて、子どもをめぐる現状を見つめ、深刻な事態に危惧しい、それに対応する課題を共有しながら、もう一度、保育のあり方を共に模索していきたいと思います。

幼保にかかわらず、甘える子どもからキレル、荒れる子どもまで、気にかかる子どもが増えてきました。私はいま、全ての子どもが「保育に欠ける」状況と思います。家庭環境の一つとっても、マス・メディアが家庭に入り、地域には安心して遊ぶ環境を失い、親子の養育関係も心配です。「ももの時間」も「家庭との連携」も考えた小さな取り組みです。

総合施設で幼小の連携が言われていますが、私はそれに加えて「幼児と乳児保育の系統性」が重要な課題だと思っています。乳児期の「愛着障害」と言われる様な親子関係の歪みが、幼児期に現れ、キレル、荒れるまで発展する事例を多く見てきました。こうした保育の課題を織り込んだ保育を各園で実践され、志向されていると思います。それを交流しあい、総合施設が何も施設体でなく地域で幼保が子育て、子育て支援を連携してつくりだし、新しい幼保関係を創造していきたくらいと思っています。

(東京家政大学)